

エキュメニズム（教会一致運動）とカソリック教会

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

エキュメニズムをめぐる諸問題

カソリックとプロテスタントを含む西方教会では、2024 年の復活祭は 3 月 31 日に行われた。しかし、ロシア正教会を含む東方教会では、復活祭の日は 5 月 5 日だった。ロシア人にとって復活祭はロシア文化の本質をなすものと考えられている。プーチン大統領はこの日、モスクワでキリル総主教が司式する教会に行き、復活祭の儀式に参列した。一方、イスラエルの聖墳墓教会はカソリックを含めた複数のキリスト教の共同管理である。今年の復活祭は格別なものとなった。カソリックは 3 月 31 日に復活祭を祝ったが、イスラエルの総主教は、同教会の聖体安置所に來た参拝者一同に、復活祭の聖火を与え、説教を行った。

カソリックの広がる西洋世界では、1582 年からグレゴリオ暦を採用しているが、東方教会などは古代ローマ以来のユリウス暦を使用し続けているので、復活祭の日付が異なっている。1900 年代に数回、暦を一致させようということで、全キリスト教会の会合がもたれたことがある。それは一種のエキュメニズム（教会一致運動）であるが、どの教派にも固有の伝統と主張があって、全面的に一致することはなかった。

これではいけないということで、コプト派の総主教であるエジプト人のタワドロスは、暦によって、各派それぞれの復活祭の日付が違わないように固定する必要があると主張している。ローマ法王フランチェスコは、カソリックで定めている復活祭の日付を、東方教会の復活祭の日に移し替えてもよいと考えているようだ。しかし、キリスト教会は現在、エキュメニズムについては、とくに強く考えていないようだ。どのキリスト教の会派もキリスト教の統一運動には積極的ではない。

一時期、その統一運動の機運が高まった時に、カソリックの第二ヴァチカン公会議が開かれ、教会一致運動が強調されたものの、その動きは今では止まっている。その背景には、各教派の「神学」の問題があり、またそれぞれの歴史、精神性によるところが大きい。コンスタンティノーブルの大司教アテナゴラスは、エキュメニズムのために尽力したが、残念ながら 1972 年に亡くなってしまった。その時点で、各キリスト教会は、過去に互いに良好な関係があったとしても、教会そのものの統一には反対するようになっていたのである。そして今日、グローバリズムを背景に、各国及び各民族の主張、各宗教の特性が表明されるようになり、キリスト教会の統一や融合はかえってキリスト教の良さを損うようになるという意見になってきた。その代表的な例がウクライナ正教会の例である。

ウクライナ正教会は、2019 年にギリシャ正教会の組織から分離独立した。これがロシア正教会の怒りを買ったのだ。そうした理由もあり、ロシア正教会は現在、プーチン大統領のウクライナ戦争を支持しているのである。またそのために、東方教会は相互につながりがなくなり、バラバラになってしまった。クレタ島で予定している全東方教会の会議の参加に、ロシアを含めた 4 カ国が拒否している。また同じ教派の中でも対立がある。例えば、ナイジェリアとウガンダの聖公会では、女性司祭を認める国々の聖公会を認めていない。またエチオピア教会は、国内の様々な問題や事柄に口を出し、国民の統合を妨げている。また、コンゴ民主共和国の教会もヴァチカンの同性愛をめぐる問題の対処に抗議し

ている。このように、ナショナリズム、民族問題、文化の相違などが教会一致運動の重石となっているのである。現在、来年の復活祭の日付の統一をめぐる話し合いがなされているが、それはエキュメニズムへの歩みの大きな一歩であろう。

民主主義や自然に対する法王の見解

現代では、民主主義の思想は多くの国で採用されている。自分は正しく、主の教えを実践していると思い、それでいて主に守られていると考える者がいる一方で、逆に自分は能力もなく、大きな社会的仕事もできないけれども、日々神の正義に従って生きていると考える者もいる。表だって反体制的な意見を言えず、発言もできない社会や国も存在する。そうした時に、あえて言葉を発し、意見をいうことが大切だ。それが政治的愛である。

「民主主義の危機」と「勇気のなさ」について苦言を呈する法王の真意は、こういうところから考える必要があるようだ。「無関心というのは民主主義のガンである」と法王は主張する。「民主主義それ自体が単純に人民の投票に結びつくわけではない。私は選挙の時に、投票に行く人たちが減少していることを憂慮している。人民全員が参加できるような状況を作り出すことを願っている。そのためには、若者のためにも、社会構成、政治構成の多様性が必要である」と言う。法王によれば、一般の人が憲法を持っているように、キリスト教徒は聖書を持っているという。なぜなら、聖書こそ我々の生命に意義を与えてくれるものであり、それは真の民主主義への指針となる。

また、法王は自然軽視の傾向に対しても次のように語っている。

3,000 年前の中国の農民、2,000 年前のテッサリア（古代ギリシャの北東部）の平地に暮らしていた農民、イタリアのトスカーナ地方の丘陵に住む住民、またサレント地方（イタリアの国のちょうど靴のカカトにあたる）の人間は自然をいかに考えていたのだろうか。収穫の際にはきっと自然へ恩返しする必要があると思っていたはずだ。

3,000 年前の北アメリカの獵師、また 2,000 年前のガリア地方の人間は、またガルファニャーナ（イタリア・ピザの北東地域）の山岳の住民は自然をどう考えていたのだろうか。日が短くなり冬が近づくと、自分たちを勇気づけてくれる存在のことを考え、寒さで死なないう、飢えに苦しめないよう、シャーマンは神々に祈ってきたのだった。

そこへキリスト教が入ってきた。キリスト教は、人々を自然から、宇宙的なものから切り離すために、精霊たちへの信仰を放棄するように、人々に主張してきた。霊を有するのは人間だけだ。神は人間を神に似せて創った。人間は自然を凌駕することになった。しかし、近年の異常気象など、自然の動きは、人間の知恵や力を超えるものが非常に増えている。

法王はそう警告し、今一度、私たち人類が自然を畏敬すべきことを主張しているのである。それはいかにも、アッシジのフランチェスコに名前をとった法王らしい主張ではないだろうか。

長い間ご愛読をいただいた「ヴァチカン便り」も終了のときがきました。この号をもってお別れになります。この間の編集者の忍耐と読者の皆さんの寛大さに、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。